平安和文における「段落」明示の形式
—源氏物語を資料として—

西　田　隆　政

1．はじめに

源氏物語をはじめとする、平安朝の和文のテキストには、句読点のような文の終止をしめす符号がつけられることはない。テキスト内で読解の便宜上の表記法として定着しているのは、和歌を字下げしてしめす程度である。文の終止が明示されないのであるから、ましてや、物語内部での話題のまとまりをしめす「段落」(注1) も明示されることはない。長編物語における巻や、短編物語における章段のようなものは存在するが、さらにその内部の区画を明示する表記法は存在しない。

しかし、物語の内部にも、当然のことながら、何らかの話題のまとまりがある。テキストの読み手にとって、それをしるための手がかりがまったくないというのはありえないであろう。換言すれば、現代日本語のテキストでそれを明示する改行と字下げに相当するような、何らかの明示するための語形式（以下形式とする）があるとかんがえるのが自然であろう。

そこで、本稿では、そのような明示をするための形式について、源氏物語を資料として、検討していくことにしたい。長編物語である源氏物語においては、それらの存在が、とりわけ不可欠とかんがえられるからである。

2．和文と「段落」

和文では、「段落」の明示以前に、句読点がつけられることもない。これは、現代日本語の文章とはちがって、どこで文が終止するのかが明示されないことでもある。しかし、現行の注釈書類では、述語の終止形や係り結びなどを手がかりとして、句読点を付して校訂されている。しかし、そのなかには、「はさみこみ」(注2) や助動詞「ず」のように、文の終止の判然としない例が多々あり、現代語の文章のような句読点を付すこと自体を否定する意見もある(注3)。

「段落」についても、それを明示するための表記上の符号は存在しない。現

行の注釈書類でしめされる「段落」は、何らかの内容のまとまりごとに、読解の便宜のために付されるものといえよう。たとえば、『新潮日本古典集成　源氏物語１』(1976) の凡例には、次のようにある。

一、なお、頭注のスペースを利用して、段落のはじめに、物語の叙述内容を要約した小見出しを色刷りで掲げた。一つの巻の叙述をどこで区切り、どう区分するかは、慎重な考慮を要する事柄であるが、今は理解を助けるための便宜の処置としてこれを試みた。

(5ページ)

この注釈書では、「理解を助けるための便宜の処置」と明言していることからしても、「段落」を付す決定的な根拠はないと判断していると理解できる。「内容を要約した小見出し」を付しているのも、何らかの話題のまとまりを基準にしていることを推察させる。

しかし、和文で「段落」を付すことが、まったく形式面からの根拠なしにおこなわれているわけではない。

〔1〕わざとの御学問はさるものにて、琴笛の音にも雲居をひびかし、すべていひつづけば、ことことしう、うたてぞなりぬべき人の御さまなりける。そのころ、高麗人のまゐれるなかに、かしこき相人ありけるをきこしめして、宮のうちにめさむことは、宇多の帝の御いましめあれば、いみじうしのびて、この御子を鴻臚館につかはしたり。(「桐壺」20ページ) (注4)

〔1〕では、最初の文が「御さまなりける」と助動詞「けり」の係り結びの文で終止し、次の文が「そのころ」と指示語を文頭にもつ。光源氏が幼少からすぐれた才能をもつことがしめされる「段落」と、高麗の相人の予言がおこなわれる「段落」との区画にあたる部分であり、それが「けり」と「そのころ」の存在により、形式の面からも明示されているとかんがえられる。

現代語においても、改行による「段落」の明示だけでなく、文末の「のである」や文頭の接続詞や指示語は「段落」の開始や終止をみちびくものとの指摘がある(注5)。もちろん、これは文末や文頭の語句の機能というだけでなく、それが使用された文自体にもその機能が保持されているとみることができる。

そこで、３章以下では、和文における、このような「段落」の開始と終止をしめす形式となる語句について、源氏物語での使用例を検討していくことにしたい。

3.「段落」の明示―文頭の形式―

源氏物語での文頭における「段落」明示の形式として、まずあげられるのは、先にあげた「そのころ」をはじめとする指示語の類である(注6)。これらは、それ以前の「段落」の叙述内容をうけて、次の「段落」へとつなげていく機能をもつとかんがえられる。

〔2〕かやうなるほどに、いとど御心のいとまなくて、おぼしおこたるとはなけれど、とだえおほかるべし。そのころ、齋院もおりゐたまひて、后腹の女三の宮ゐたまひぬ。(「葵」285ページ)

〔3〕京のことを、かく関へだだりては、いよいよおぼつかなくおもひきこえたまひて、……いまさらに人わろきことをばと、おぼししづめたり。その年、おほやけにもののさとししきりて、ものさわがしきことおほかり。(「明石」461ページ)

〔4〕兵部卿宮の中の君もさやうに心ざしてかしづきたまふ名たかきを、おとどは、人よりまさりたまへとしもおぼさずなむありける。いかがしたまはむとすらむ。その秋、住吉にまうでたまふ。(「澪標」499ページ)

〔5〕めしありて、うちのおとど、権中納言まゐりたまふ。その日、帥の宮もまゐりたまへり。(「絵合」569ページ)

〔6〕これらにおもしろさのつきにければ、ことごとに目もうつらず、かへりてはことざましにやありけむ。その夜、源氏の中将、正三位したまふ。(「紅葉賀」240ページ)

〔2〕から〔6〕には、「そ」系の指示語の例をあげた。これらは、以前の文脈を指示したうえで、「その」時点にどのようなできごとがあったかを、指示語以下の文でしめしている。〔2〕の葵の例では、光源氏が六条御息所のもとへとだえがちであったということがあり、「そのころ」斎院の交代で弘徽殿の后の娘がたったとされる。〔6〕の絵合では、試楽のおこなわれた「その夜」に、光源氏が加階をうけたということである。

以前の文脈が指示されることで、それまでの叙述内容がそこでまとめられて、指示語以下の文では、その文脈をふまえた時点での叙述がおこなわれる。結果として、指示語の前後で文脈の連続性が中止し、「段落」の区画をしめすことにもなる。

ただ、「そ」系の指示語の場合は、「その」の修飾する時をあらわす語句の意味により、その「段落」区画のあり方に差異が存在する。〔1〕と〔2〕にあげ

た「そのころ」では、時を限定せずにしめすことによって、「その」の指示する時点との直接的な連続性をもたせずに、話題の大きな転換をしめす機能をはたしている。これは、「そのころ」が源氏物語中の紅梅、橋姫、宿木、手習の諸巻で、巻冒頭文にもちいられていることからも、理解されるところである(注7)。また、〔3〕「その年」や〔4〕「その秋」など、時間の幅の比較的大きな語でも、「そのころ」に準じるような、「段落」の区画となっているとかんがえられる。

それに対して、〔5〕「その日」と〔6〕「その夜」のような、時の限定の幅が一日の範囲におさまるような語では、指示された文脈をふまえた「その」一日に、指示語以下の叙述内容があったということになる。〔5〕では、内裏に内大臣である光源氏と権中納言とが参上した「その日」に帥の宮も参上したということである。とすると、物語の文脈上では話題の転換というよりは、その時点での補足的な説明がおこなわれるとなる可能性がたかいであろう。「そ」系の指示語の例は、「その」に修飾される語句の意味による差異はあるものの、指示語を配することにより、文脈の連続性が中止し、「段落」の区画をしめすものとかんがえられるのである。

同様のことは、〔7〕から〔9〕にあげた「か」系の指示語の例でもみることができる(注8)。

〔7〕なほ、この内侍にぞ、おもひはなれずはひまぎれたまふべき。かくて、御まゐりは、北の方そひたまふべきを、「常にながながしうは、えそひさぶらひたまはじ。かかるついでに、かの御うしろみをやそへまし」とおぼす。(「藤裏葉」1009ページ)

〔8〕……物怪にむかひて物語したまはむもかたはらいたければ、封じこめて、上をば、またことかたにしのびわたしたてまつりたまふ。かく、うせたまひにけりといふこと、世の中にみちて、御とぶらひにきこえたまふ人々あるを、いとゆゆしくおぼす。(「若菜上」1187ページ)

〔9〕院をはじめたてまつりて、親王たち、上達部のこるなきうぶやしなひどもの、めづらかにいかめしきを、夜ごとにみののしる。男にてさへおはすれば、そのほどの作法にぎははしくめでたし。かの御息所は、かかる御ありさまをききたまひても、ただならず。かねてはいとあやふくきこえしを、たひらかにもはたと、うちおぼしけり。(「葵」300ページ)

〔7〕では、賀茂の祭の際に、近衛府の使となった頭中将である夕霧が、おなじく使となった惟光の娘である内侍と男女の関係となっているという直後に、

「かくて」以下、明石姫君の入内に際して、光源氏が実母の明石の方をつけようと配慮しているとつづく。「かくて」の場合、「そのころ」などとは相違して、「その」で指示された時点をふまえるというよりは、以前の文脈自体を指示したうえで、「かくて」以下の叙述につなげていく。

〔8〕の「かく」の例では、紫上が六条御息所の霊にとりつかれて危篤状態になった際の光源氏と霊とのやりとりのあとに、そういう状況で紫上が死去したとのうわさが世にひろまってとつづいている。「かく」が、それ以前の文脈を指示して、以下の話題の前提となっている。

〔9〕では、あやうい状況のはずであった葵上が意外にも無事出産したとあって、そのことをしった、あの車争いと生霊の当事者であった六条御息所が、平静な気持ちではいられないとある。「かの」が人物名につくことで、以前話題になった人物が、あらためて登場したことを意識させる例である。

ただし、「かくて」「かく」「かの」でも、「段落」の区画のありかたに差異が存在する。「かくて」は、それ以前の広範囲の文脈を指示しており、〔7〕では藤裏葉巻全体での懸案である明石姫君の入内前のさまざまな状況がその内容となる。それに対して、「かく」や「かの」の場合は、指示する範囲はその直前の文脈であり、〔8〕では紫上の危篤の様子、〔9〕では出産した葵上にとりついていた人物となる。

これら「か」系の指示語の例は、「そ」系の指示語のように、物語における時点をとくに指示するものではないが、以前の文脈を指示することによって、それ以下の文では指示された内容を前提として、物語の叙述がすすめられる。その点では、「そ」系の指示語と同様に、結果として、前後の文脈での連続性が中止し、「段落」の区画をしめすものともなりうるのである。

〔10〕の「さて」の例は、直前の文脈を指示するものである。現代語とはことなり、文脈を転換させるような用法ではない(注9)。

〔10〕「よき賭物はありぬべけれど、かるがるしくはえわたすまじきを、なにをかは」などのたまはする御気色、いかがみゆらむ。いとど心づかひしてさぶらひたまふ。さて、うたせたまふに、三番に数ひとつまけさせたまひぬ。(「宿木」1704ページ)

薫と囲碁をおこなった今上帝が、勝負の賭物として女宮を暗示させている例で、それをさとった薫が心して控えていたとあって、そういう状況で囲碁をうつと帝が三番中の一番をまけたという内容である。「さて」は、直前の文脈として対局前の状況を指示している。

源氏物語中の「さて」の使用例は、ほぼこのような例にかぎられ、「そ」系、「か」系の指示語よりは指示する範囲がせまいものとかんがえられる。しかし、以前の文脈を指示して、その部分でまとめるという機能をもつという点では、やはり「段落」として話題の区画をしめしうるものであろう。

また、これら指示語の例以外にも、「段落」の区画を意識させる例が存在する。〔11〕の人物名の例(注10)、〔12〕の時節をしめす例である(注11)。

〔11〕腹々に御子どもいとあまたつぎつぎにおひいでつつ、にぎははしげなるを、源氏のおとどはうらやみたまふ。大殿腹の若君、人よりことにうつくしうて、内裏、東宮の殿上したまふ。（「澪標」486ページ）

〔12〕良房のおとどときこえける、いにしへの例になずらへて、白馬ひき、節会の日々、内裏の儀式をうつして、昔の例よりもことそへて、いつかしき御ありさまなり。きさらぎの二十日あまり、朱雀院に行幸あり。（「少女」703ページ）

〔11〕は、権中納言には子息が何人もいるのを、光源氏はうらやましくおもうということがあって、つづいて、光源氏の息子である大殿腹の若君が殿上する話題となる。〔12〕は、六条院での正月の節会が、昔の例以上に盛大におこなわれたとあって、二月二十日すぎの朱雀院への行幸の話題となる。

ともに、指示語は使用されないものの、人物名や時節以降では、ことなった話題となっているのが理解される。このように、それまでの話題とは直接関係しない人物の登場することの明示や、次の話題のおこなわれる時節の提示によって、これらの語句も「段落」の区画として機能しているのである。

以上、3章でとりあげた、「そ」系と「か」系の指示語の例、人物名と時節の例は、いずれもが何らかの話題の変化のあることをしめし、結果として「段落」の区画をしめしている。和文では、改行のような表記形式となるものはないものの、「段落」の開始をしめしうる形式として、これらの語句が機能しているとかんがえられるのである。

4.「段落」の明示　－文末の形式－

文末における「段落」明示の形式としては、物語の語りをになうとされる助動詞「けり」(注12) をまず指摘することができる。

〔13〕宰相二人、左衛門督、右衛門督、左右の楽のことおこなふ。舞の師どもなど、世になべてならぬをとりつつ、おのおのこもりゐてなむありける。木たかき紅葉の蔭に、四十人の垣代、いひしらずふきたてたる物の音

どもにあひたる松風、まことの深山おろしときこえてふきまよひ、いろいろにちりかふ木の葉のなかより、青海波のかかやきいでたるさま、いとおそろしきまでみゆ。(「紅葉賀」239ページ)

〔13〕では、朱雀院行幸の楽と舞の準備が周到におこなわれたことがあってから、その青海波の楽と舞がすばらしいものであったとつづく。「けり」の部分でひとつの話題がおわり、その文の終止が明示されて、以下の文では、あらたな話題がはじまっている。

〔14〕親王は、あはれなる御物語きこえたまひて、くるるほどにかへりたまひぬ。花散里の心ぼそげにおぼして、常にきこえたまふもことわりにて、かの人もいま一たびみずはつらしとやおもはむとおぼせば、その夜はまたいでたまふものから、……(「須磨」404ページ)

〔14〕は、助動詞「ぬ」による段落明示の例である(注13)。謹慎している光源氏の屋敷から親王がかえられて、それから、光源氏が花散里をたずねたとある。「かへりたまひぬ」と人物の移動動作の完了が明示されることで、その場面の「段落」も終止し、以下の文からはあらたな話題がはじまる。

〔15〕「年ごろになりぬる心地して、みたてまつるも心やすく、本意かなひぬるを、つつみなくもてなしたまひて、あなたなどにもわたりたまへかし。いはけなきうひ琴ならふ人もあめるを、もろともにききならしたまへ。うしろめたく、あはつけき心もたる人なきところなり」ときこえたまへば、「のたまはせむままにこそは」ときこえたまふ。さもあることぞかし。くれかたになるほどに、明石の御方にわたりたまふ。(「初音」767ページ)

〔15〕は、終助詞「かし」による段落明示の例である(注14)。六条院での新春に光源氏が花散里をたずねた際に、玉鬘とやりとりをして、「さもあることぞかし」と語り手の批評でその話題がまとめられてから、「くれかたに」明石の方のもとをたずねたとある。

〔16〕律師のいとたふとき声にて、「念仏衆生摂取不捨」とうちのべておこなひたまへるは、いとうらやましければ、なぞやとおぼしなるに、まず姫君の心にかかりて、おもひいでられたまふぞ、いとわろき心なるや。例ならぬ日数も、おぼつかなくのみおぼさるれば、御文ばかりぞしげうきこえたまふめる。(「賢木」356ページ)

〔16〕は、「草子地」ともされる、語り手の批評が直接にでている例で、〔15〕の「かし」にも通じるものである(注15)。光源氏が雲林院にこもっている際にも姫君(紫上)のことが気にかかり、それを未練がましい心だとする批評があっ

て、二人の手紙のやりとりがあった話題となる。

〔13〕から〔16〕にあげた、文末の形式が「段落」区画を明示する例は、いずれも文末助辞のある文でそれまでの話題がまとまり、それにつづく文では、次の話題が展開していく。3章でとりあげた、文頭の形式の例が、それまでの話題を指示語でまとめることにより、次の話題を開始しているのに対して、これら文末の形式は、それまでの話題がそこで終止することを確認したことにより、次の話題が展開することを示唆している。文頭と文末というちがいはあるものの、ともに次の話題をみちびきだしているということで、「段落」の区画を明示する機能をもつ形式とみることができる。

また、この文末と文頭の形式が、同時に使用される例もある。

〔17〕尚侍の君も、まことのおやをばさるべきちぎりばかりにおもひきこえて、ありがたくこまかなりし御心ばえを、年月にそへて、かく世にすみはてたまふにつけても、おろかならずおもひきこえたまひけり。かくて、きさらぎの十余日に、朱雀院の姫宮、六条院へわたりたまふ。（「若菜上」1057ページ）

〔18〕大宮のかたちことにおはしませど、まだいときよらにおはし、ここにもかしこにも、人のかたちよきものとのみ目なれたまへるを、もとよりすぐれざりけるかたちの、ややさだすぎたる心地して、やせやせに御ぐしすくなるなどが、かくそしらはしきなりけり。年のくれには、むつきの御装束など、宮はただこの君ひとところの御ことをまじることなういそぎたまふ。（「少女」701ページ）

〔17〕は、「けり」と「かくて」の例である(注16)。四十の賀をむかえた光源氏に対して尚侍の君（玉鬘）は本当の親よりも心づかいをしているという話題から、「かくて」以下で、朱雀院の姫宮（女三の宮）が光源氏の六条院へと降嫁する話題となる。

〔18〕は、「けり」と時節の例である(注17)。夕霧が祖母の大宮と親がわりの花散里をくらべている話題から、年の暮に大宮が夕霧の装束の世話をするという話題となる。

このような文頭と文末の形式が同時に使用される例は、先にあげた桐壺の〔1〕の例だけでなく、源氏物語中にいくつも例をみることができる。なお、これらの機能については、巻ごとに検討していく必要があるが、どちらか一方のみが使用される例より、源氏物語の巻内部でのよりおおきなまとまりとしての「段落」の区画を明示する場合がある(注18)。

以上、3章と4章では、源氏物語中での文頭と文末の「段落」明示の形式について概観した。改行のような「段落」をしめす符号はなくとも、話題のまとまりをしめす形式が存在することからすると、和文のテキストにおいても「段落」のような話題のまとまりの意識があり、それを明示することもおこなわれていたと理解されるのではなかろうか。内容の面からだけでなく、形式の面でも「段落」を明示するという意識があったとおもわれるのである。

5．文と「段落」の認定

源氏物語は全編54の巻から構成される長編物語である。それぞれの巻が一つの物語構成上の単位であることは自明であるが、その巻の内部がどのように「段落」構成されているかについては、現代語のテキストのように明示されているものではない。改行のような表記法が存在しない以上、それは読み手の理解にまかされていたということにもなる。

しかし、ここまで検討してきたように、源氏物語中でも、文頭や文末の形式により話題のまとまりとしての「段落」が明示されているとかんがえることが可能である。このことは、和文のテキストにおいて、読解上の手がかりが明示されていたということであり、改行が存在せずとも、それに相当する形式がおのずと使用されていたということでもある。

これは、和文のテキストにおいて、文の終止や連接が句読点によって明示されていないものの、構文中のさまざまな要素によりしめされている(注19)ことにも通じるとおもわれる。句読点や改行などの表記法が存在しない和文のテキストでは、これらの要素の使用意識解明が重要な課題となるのである。

〔注〕

（1）「段落」の定義の研究史については、佐久間（1983）による整理がある。塚原（1966b）では、論理的段落と修辞的段落とを措定し、文章の筆者が改行等により形式的に設定する段落を修辞的段落として、文章構造の論理的把握から設定される論理的段落と区別する。本稿では、論理的段落の観点で「段落」の用語を使用する。ただし、現代語の文章での改行による「段落」の提示については、塚原（1966b）の指摘のように、本質的には修辞的段落であるものの、結果的には論理的段落と合致する場合があり、和文における「段落」の設定を検討するうえで、対比しうるものであるとかんがえる。

（2）佐伯（1953）による。塚原（1977）では「挿入表現」と規定する。

（3）小松（1997）による。

（4）源氏物語の引用は、池田（1953）によりページ数をしめした。引用に際して、適宜、かなづかいをあらため、濁点をほどこし、漢字をあて、句読点をつけた。引用中の下線は、私につけた。

（5）野村（2000）に研究史の整理がある。「のである」については永野（1986）、指示語については相原（1987）を参照。

（6）西田隆（1999b）による。

（7）塚原（1971・1982）による。

（8）西田隆（1999a・1999d・2001b）による。

（9）西田隆（2001a）による。

（10）西田隆（2001b）による。

（11）西田隆（2000a）による。

（12）阪倉（1956）、塚原（1975・1976・1987）による。

（13）西田隆（1993・1996b・1999e・2000b）による。

（14）西田隆（1991）による。

（15）西田隆（1998a）による。

（16）西田隆（1996c・1997b）による。

（17）西田隆（2000a）による。

（18）西田隆（1995・1996a・1996b・1996c・1997b・1998b・1999c）で具体例を検討した。

（19）西田隆（2003）による。

＜参考文献＞

相原林司　1987　「接続語句と文章の展開」（『日本語学』6－9）

池田亀鑑　1953　『源氏物語大成校異篇1～3』（中央公論社・調査は9版による）

石田穣二・清水好子　1976　『新潮日本古典集成　源氏物語1』（新潮社）

小松英雄　1997　『仮名文の構文原理』（笠間書院）

佐伯梅友　1953　「はさみこみ」（『国語国文』22－1・『上代国語法研究』（大東文化大学東洋学研究所、1966）所収）

阪倉篤義　1956　「竹取物語の構成と文章」（『国語国文』25－11・『文章と表現』（角川書店、1975）所収）

佐久間まゆみ　1983　「段落とパラグラフ」（『日本語学』2－2）

佐久間まゆみ　1987　「段落の接続と接続語句」(『日本語学』6－9)

佐久間まゆみ　2000　『日本語の文章・談話における「段」の構造と機能』(平成9～11年度科学研究費補助金　基礎研究(C)(2)研究成果報告書)

塚原鉄雄　1966a　「文章と段落」(『人文研究』17－2・塚原1987所収)

塚原鉄雄　1966b　「論理的段落と修辞的段落」(『表現研究』4・塚原1987所収)

塚原鉄雄　1971　『王朝の文学と方法』(風間書房)

塚原鉄雄　1975　「竹取物語の方法－文章構成の基本原理－」(『鑑賞日本古典文学竹取物語』角川書店)

塚原鉄雄　1976　「竹取物語の文章構成」(『中古文学』17・塚原1987所収)

塚原鉄雄　1977　「挿入句－文章の重層－」(『国文学』22－1・『国語構文の成分機構』(新典社、2002)所収)

塚原鉄雄　1982　「源語各帖の冒頭表現－源氏物語の作品構成－」(『源氏物語の研究』7　風間書房)

塚原鉄雄　1987　『王朝初期の散文構成』(笠間書院)

永野　賢　1986　『文章論総説』(朝倉書店)

西田直敏　1992　『文章・文体・表現の研究』(和泉書院)

野村眞木夫　2000　『日本語のテクスト－関係・効果・様相－』(ひつじ書房)

西田隆政　1991　「源語初音の表現構成－終助詞「かし」による文末規定－」(『西山学報』39)

西田隆政　1993　「源語須磨の表現構成－助動詞「ぬ」による段落構成－」(『中古文学』51)

西田隆政　1995　「源氏物語薄雲の巻の段落構成－助動詞「けり」使用の一方法－」(『西山学報』43)

西田隆政　1996a　「源氏物語藤裏葉の巻の段落構成－巻相互の連接性をめぐって－」(『国語の研究』23)

西田隆政　1996b　「源氏物語葵の巻の段落構成」(『大分大学教育学部研究紀要』18－2)

西田隆政　1996c　「源氏物語若菜上の巻の段落構成－前後の巻との連接性をめぐって－」(『文学史研究』37)

西田隆政　1997a　「源氏物語における対偶構成の巻々(1)－紅葉賀の巻と花宴の巻をめぐって－」(『大分大学教育学部研究紀要』19－1)

西田隆政　1997b　「源氏物語若菜下の巻の構成方法－上下巻構成と段落構成の関連をめぐって－」(『大分大学教育学部研究紀要』19－2)

西田隆政　1998a　「源氏物語における対偶構成の巻々(2)―賢木の巻をめぐって―」（『大分大学教育学部研究紀要』20―１）

西田隆政　1998b　「源氏物語における対偶構成の巻々(3)―明石の巻をめぐって―」（『大分大学教育学部研究紀要』20―２）

西田隆政　1999a　「指示語「かくて」と源氏物語の段落構成」（『国語語彙史の研究18』和泉書院）

西田隆政　1999b　「源氏物語の段落構成と「そ」系の指示語―「そのころ」「その年」「その日」「その夜」をめぐって―」（『大阪市立大学文学部五十周年記念　国語国文学論集』和泉書院）

西田隆政　1999c　「源氏物語宿木の巻の構成方法」（『大分大学教育福祉科学部研究紀要』21―2）

西田隆政　1999d　「源氏物語の段落構成と「か」系の指示語―「かく」「かう」を中心に―」（『井手至先生古稀記念論文集　国語国文学藻』和泉書院）

西田隆政　1999e　「源氏物語における助動詞「ぬ」の文末用法―場面おこしと場面とじをめぐって―」（『文学史研究』40）

西田隆政　2000a　「源氏物語における指示語「かくて」の一用法―少女の巻をめぐって―」（『大分大学教育福祉科学部研究紀要』22―１）

西田隆政　2000b　「助動詞「つ」「ぬ」と係り結び―源氏物語を中心に―」（『表現研究』71）

西田隆政　2000c　「源氏物語横笛の巻の段落構成―助動詞「けり」による段落構成の巻々―」（『大分大学教育福祉科学部研究紀要』22―２）

西田隆政　2001a　「源氏物語における指示語「さて」の用法―平安和文での接続詞的用法の展開をめぐって―」（『国語語彙史の研究20』（和泉書院）

西田隆政　2001b　「源氏物語の段落構成と指示語「かの」」（『筑紫語学論叢　奥村三雄博士追悼記念論文集』風間書房）

西田隆政　2003　「平安和文における文の終止―源氏物語を資料として―」（『甲南女子大学研究紀要　文学・文化編』39）